

【最優秀書評賞】 日本の部活（BUKATSU）—文化と心理・行動を読み解く

名前 山本真瑞

学生時代の青春の一コマとして広く認識されている部活動（以下部活）だが、我々が改めて「部活とは何か」と問うことは少ないだろう。日本の部活は指導方法や活動時間・期間の面からみて独自の仕組みがある。つまり部活には日本文化が凝縮されており、部活とは何かを問うためにはそのあり方についてだけにとどまらず、部活を超えた問題として日本の学校や社会・文化について考える必要がある。今回紹介する書籍は、こうした問いに筆者自身の異文化経験を基に取り組んだ記録である。

本書は筆者自身や筆者の娘、息子のアメリカ合衆国（以下アメリカ）と日本での部活経験を基にしており、日本の部活をアメリカのものと比較しつつ文化心理学的観点からアプローチし、分析している。日本の部活は課外活動であるため、学習指導要領には部活に関する記述はほとんどなく、教員養成課程の授業で取り扱う必要がない。だが、2013年に顧問の体罰が原因で生徒が自殺したと報じられ、部活の閉鎖性は大きな社会問題となり、体罰以外の部活の問題点もマスメディアやネット上で取り上げられるようになった。また、現役教師の部活動顧問制度の現状を訴えたブログが評判になり、教員の視点からも部活のあり方が問題視された。そこで「ブラック部活動」という言葉も現れ、部活を取り巻く問題点が公の場で噴出した。著者は、四つの観点から部活の問題点について論じ、よい面もあるが、友情や感動を日本で実施されている形態の「部活」でしか得られないものとする、アメリカのような海外の部活では得られないことになるため、それらが本当に日本でしか得られないものであるか少し考える必要があると指摘している。さらに日本の部活が日本文化を凝縮しているのならば、部活の変革が一般社会の常識も変革させることにつながるのではないだろうか論じている。

つまり、私たちの社会に定着し習慣化されたものは少々問題があったとしても、それを変えることは非常に難しく、その習慣化されたものは周辺の習慣とも密接に関係しているため、修正すべき点を一点突破で変えられるものではない。このようなことを筆者は「部活文化」と称し、日本の部活の特徴と部活の諸問題を挙げながら制度的なことを中心に、非現実的かもしれないしつつ改善案を提示し、指導者が部活に内在する四つの主義をどのように考えることができるのかを述べている。四つの主義とは、「勝利至上主義」、「気持ち主義」、「一途主義」、「減点主義」である。これらの主義は筆者が部活や国内外の類似した活動およびその周辺を観察した結果も踏まえ、仮説的に得られたものである。

本書の優れた点は、アメリカの部活との比較を用いて、日本の部活の背後にある日本文化との関係を明確にしたことである。仮にこの書籍が日本の部活にのみ注目していたならば、日本独自の文化に気づくことは難しいだろう。部活と日本文化の関係を通して、学校や生徒、メディアの思惑と日本文化が錯綜している現状に焦点を当てていることが、この本の醍醐味である。

また、本書では日本の部活の問題点として、過酷な部活環境がなかなか改善されないことを明らかにしている。過酷な部活環境を第三者の視点のみで批判するのではなく、授業の受講生を対象とした調査や、文部科学省が実施した体罰による職員の処分件数、スポーツ庁が公開しているデータによる、教員が顧問になることが原則となっている割合など、具体的な数字を用いて言及されている点も評価に値する。

一方で本書は、筆者自身も認めるのではあるが、運動部の話題への偏りは否定できない。筆者の経験を基にしているため致し方ないとしても、もう少し文化部に関するブログやデータを参照するなどの工夫があったならばよりその価値をあげたと言えよう。

総括すれば、この本は「部活文化」を学ぶうえでは、非常に分かりやすい書籍である。「部活文化」を取り扱う本は他にもあるものの、部活の実体を取り扱うことが多く、理論的な分析は少ない。本書は日本独自の文化や部活の四つの主義といった感情や主観が関与しかねない部分を複数のデータと経験をもとに筋道を立てて論じている。また、本書の第二章から第五章で述べられていたような部活の四つの主義という視点は、部活に限らず他の文化を研究・分析する際にも非常に役立つと考える。